	②小学校入学後、学校が楽しくてたまらないくら子と、それを見送る親の気持ちを考える。 ③周りからいじめられるようになったくら子の気持ちと、じっと抱きしめる母親の気持ちを考える。 4　同じ学年の男の子たちに抗議するくら子の行為について考える。 ①抗議しないと、その後どのようなことが起こるか想像する。 ②抗議すると、その後どのようなことが起こるか想像する。 ③自分ならどうするか、黒板にネームカードを貼る。 抗議する　←　｜　→　我慢する ④なぜ、そうするのかを語り合う。 5　このような迷いがくら子にもあったこと、そんな迷いの中でくら子は抗議したことを確認をする。 （P66 L11～P67L12）	・くら子や親の悲しみを共感的に感じさせるため、「しっかり抱きしめ」などの叙述に着目させる。 ・抗議しない時、抗議した時、それぞれに起こりうることを推測させる。 （①②をせずに自分の行為をじっくり考えさせる時間としてもよい） ・経験した子どもは経験を語らせる。左直線に自分のネームカードを貼らせる。迷っている、葛藤している子も大事に扱う。 ・抗議する行為を教師が求めない。 ・子どもたちの思いを教師は共感的に受け止める。 ・親や先生への思いを語る子どもも大事に扱う。 ・資料の続きを読む。		ﾈｰﾑｶｰﾄﾞ
まとめ	6　本時の学習について、自分で考えたことや学んだことを感想にまとめる。	・くら子も、みんなと同じように迷い、悩みながら生きたこと。しかし、差別に対する怒りや勇気をもっていたこと、そのちょっとした勇気はみんなの中にもあることを伝える。	10	学習カード

◇１時間扱いで学習する場合、本時の後半で「第２時」に扱う部分を教師が朗読して終わる方法もある。

5　第２時

（１）主眼

女学校でも不当な差別を受け、深い悲しみを味わった高橋くら子が、弁士として活躍するようになった場面で、長野県水平社創立大会でくら子がどんなことを考えながら訴えたのか話し合うことを通して、自分の考えを伝え正義の実現に努めたくら子のたくましい生き方を感じ取ることができる。

（２）指導上の留意点

①　資料の後半は、女学校時代弁士として活躍するくら子を中心に扱う。

②　前時を見返すことができるよう、学習内容や子どもたちの考えを掲示（模造紙）しておく。

（３）展開

	学習活動（児童の意識の高まり）	指導・助言	時	備考
導入	1　迷いや悩みながらも、勇気をもって抗議したくら子の小学校時代を振り返る。	・くら子の小学校時代を確認する。	2	
展開	2　資料「わたしの道を」（ｐ67L13−ｐ71）を読む。 3　資料の「女学校時代」を中心に、くら子の思いを考える。 ①五年間だれ一人として話し相手になってくれる人もなく、ひとりぼっちにさせられ続けたくら子の気持ちを考える。 ②朝倉重吉や水平社宣言に出会ったくら子の気持ちを考える。 4　長野県水平社創立大会で、くら子はどんなことを考え（願い）ながら「今こそ私たちが　立ち上がるべきです」と訴えたのか考える。 ・差別を受けたときの悲しみ ・差別解消へ立ち向っていく強い決意 ・差別をこの世からなくしたいという強い願望 ・平等な社会の実現を願う気持ち ・一人一人の人間を尊重する考え ・差別された者が立ち上がることの大切さ ・女性解放への願い	・必要なところに解説を加えながら教師が朗読する。 ・朝倉重吉や部落差別について説明する。 ・差別された苦しみや悲しみなどについて想像させる。 ・差別されながらも、心の支えになったのが、両親や村の人たちの励ましであったことを押さえる。 ・水平社宣言は、見返すことができるように掲示したり、各自がﾌｧｲﾙに綴じたりするなどしておく。 ・訴えたくら子の考えをじっくりと考えさせるために、文章を読み返したり学習カードに書いたりする時間をとる。 ・多くの意見を認め、くら子の考えを重層的に捉える。	33	資　料『あけぼの』 水平社宣　言（現代語版） 学習カード
まとめ	5　くら子の生き方について、自分で考えたことや学んだことを感想にまとめる。	・自らの考えから差別をなくすため行動したくら子のたくましさを感じ取っている意見をとり上げる。	10	学習カード

◇「女学校生活の中で自分の心を閉ざしがちだったかたくなな表情のくら子」と「本当の自分の心を開いたくら子」を対比したり、「活動に参加するために学校を休むことが決してなかったくら子」の行為を考えたりすることで、より高い目標を立て希望と勇気を持ってくじけないで努力することの大切さを感じ取らせる学習にすることもできる。内容項目１－（２）

6　参考資料

（1）　長野県水平社創立大会と高橋くら子

資料の中にある県水平社創立大会で演説するくら子の様子については、次のような記述がある。

長野県水平社創立大会は、朝倉重吉ら佐久地方の先進的な部落青年たちにより、大正十三年四月二十三日（水曜）に小諸町の劇場高砂座で開かれた。小諸高女五年生のくら子はこのとき朝倉重吉の推挙により弁士の一人として大会に参加する。多数の警官の警戒するなかで佐久全域と小県郡・埴科郡などから集まった解放を叫ぶ約五百人の部落民によって会場は熱気にあふれていたという。経過報告、綱領と宣言の決議、ついで信濃同仁会などの融和主義に対して、被差別部落民自身による解放のたたかいの核になる各地水平社の開拓と運動のすすめ方を協議し、執行委員長には高橋滝治、執行委員に朝倉重吉と高橋修峰らを選んだあと、午後になって演説会に入った。学校の授業を終わってすぐ、小諸高女から坂をまっすぐ下って十分ほどのところにあった大会場の高砂座にかけつけた高橋くら子は、全国水平社の代表の演説に伍して紅一点の弁士“婦人水平社少女闘士”として紹介され、一番後に三十分ほどの演説をした。この創立大会に参加した古老たちの話によれば、壇上には臨監の警官が「弁士注意」と叫んで演説を制止し、場内は二メートルおきに一人ぐらい制私服警察官が警戒するなかで、おさげ髪に紫のはかまをはいた十七歳の女学生くら子はまさに異色で、聴衆の注目を集めたという。くら子はものおじせずにすじの通った論旨を、さわやかな声で語ったという。彼女を知る関係者の話や今日残された女学校時代の写真をみると、くら子は太ってはいたが体格は小柄であり、ひきしまった表情だがけっして美人とはいえない。しかし当日の演壇上のくら子は堂々としていて立派であり、生き生きとした知的な表情は美しかったという。これは、ふだんの女学校生活のなかで自分を閉ざしていたがためのかたくなな表情とは対照的であった。ほんとうの自分の心を開いたための感動が、表情にあらわれたものにほかならないといえよう。

（『人権感覚を深めるために　長野県の同和教育をめぐる私論』P30-31　東栄蔵　銀河書房刊）

（2）朝倉重吉　［1896 年（明治 29 年）～1967 年（昭和 42 年）］

高橋くら子の考えに影響を与えた朝倉重吉は、次のような人物であったという。

北佐久郡出身。少年期は東京で奉公し、その時読み書きを独学で覚え、大正デモクラシー思潮に敏感に呼応し、演説会で尾崎行雄や大杉栄らの影響を受けた。

２０歳で帰郷し、翌年結婚した。雨宮水平社創立大会では小山薫とともに司会をし、水平社の活動に入っていく。長野県水平社創立大会のとき執行委員になり、後に執行委員長となる。重吉は、臼田警察署差別事件など主な事件に奔走する。

全国水平社大会には、長野県代表として参加し、全国水平社中央委員も経験した。議長団に推挙され名議長と評判にもなった。この間、松本治一郎、米田富ほか、全国水平社指導者らとも親交を深める。また、農民運動や政治活動でも活躍し、県議会議員には４回立候補、弱者救済を訴えるがいずれも惜敗した。

戦時下では長野県同和会でも活動し、戦後いち早く部落解放運動に立ち上がり、部落解放全国委員会長野県連合会を設立し、委員長として活躍した。

（中学生版『あけぼの　人間に光あれ』活用の手引 P76　　長野県同和教育推進協議会）

（３）　弁士時代のくら子の活躍

弁士として解放運動に活躍したくら子の様子については、次のような記述がある。

小諸高等女学校を卒業した高橋くら子の水平運動における活動は、卒業期の大正十四年から翌十五年にかけての弁士としての活動が彼女の短い生涯のなかで最もめざましいものであり晴れやかなものであった。

女学生としての自己に課した束縛が解きはなたれたこと、水平社大会の参加費用はすべて父に支援してもらえるという家庭環境と、長野県内の水平社創立期の躍動という外的条件とが重なって、くら子の活動は目をみはらせるものがあった。つねに朝倉重吉とともに、東信濃各地の水平社大会に紅一点の女性弁士として参加し、学校で受けた差別の苦しみと婦人の自覚を訴え、水平運動の連帯を呼びかけるくら子の演説は、婦人の参加者を特に感動させたという。

くら子はまた水平社の創立によって、次々に持ちこまれる様々な差別事件の糾弾演説会や、臼田署警察官差別糾弾闘争などにも朝倉とともに参加しているが、とくに結婚差別には被害者の女性の立場に立って積極的にたたかったという。これらの行動のなかから『自由新聞』などに論稿も寄せたり、関東水平社など県外の水平社大会にも弁士として参加してひろく県内外の同士と交わるようになり、高橋くら子の名は次第に知られるようになっていく。昭和二年に広島で開かれた全国水平社第六回大会には、二十歳のくら子も長野県水平社代議員として朝倉重吉とともに参加し、軍隊内の部落差別に関して天皇に直訴して捕われた北原泰作の家族支援のために、会場で義援金募集の提案をして注目されるが、帰宅してから背後関係を疑われて小諸署に連行留置される。

こうしたくら子の水平社運動の闘士としての行動を支えた思想の根は何であろうか。私は二つの契機を指摘できると思う。一つは、すでに述べたように、小諸高女の五年間とその源流としての小学校時代の六年間を合わせた十一年間の彼女自身の少女期すべてをかけた差別とのたたかいの中で形成されたものだということである。この意味では特に小諸高女生時代の孤独な緊張を強いられた五年間のたたかいがあったからこそ、その後のくら子の開花を可能になりえたといえよう。もう一つは、こうした女学生時代のくら子の心を発見し励まし、部落解放の理論的な認識を触発してくれた朝倉重吉のことを挙げなければならないと思う。

（東栄蔵『人権感覚を深めるために　長野県の同和教育をめぐる私論』P41-42　銀河書房刊）

（４）　視聴覚資料

ビデオ「同和教育ビデオ　愛と自由のために～くら子のメッセージ～」

企画：長野県同和教育推進協議会　製作：信越放送株式会社

（『同和問題学習展開案』（長野県教育委員会）より）

真新しい教科書　（社会科）

対象：小学校６年生以上

1　主題名「真新しい教科書」（資料　『あけぼの』小学校高学年向け）
　内容項目４－（２）「だれに対しても差別することや偏見をもつことなどなく公正・公平にし、正義の実現に努める」

2　主　眼
　貧しさから教科書を買ってもらえなかった子どもたちについて考える場面で、悪口を言われて学校へ行けなくなってしまった気持ちを考えたり、教科書を持たせたいと願う親の気持ちを吹き出しに書いて話し合ったりすることを通して、貧しさに起因する差別に立ち向かっていった人々の勇気を感じとることができる。

3　人権教育の視点
○教科書が無償化された経緯と意義について理解する。（知識）
○差別に立ち向かっていった人々の勇気に共感する。（価値・態度）

4　指導上の留意点
○解放令以降の近代の被差別部落の歴史については、差別解消のために全国水平社の創立に尽くした人々がいたことや差別により貧困に苦しんだ人々も存在していたことを振り返らせ、高知では、それらの人々が中心となって教科書無償運動をすすめ、運動の全国的なさきがけとなったことを資料の記述をもとに教師が説明をする。
○被差別部落だけの問題ではなく、すべての親と子どもの問題であるととらえられるよう、教科書無償配布の恩恵を享受している自分を自覚できる場面を位置づける。

5　展開

	学習活動の児童の意識の高まり	指導・助言	時	備考
導入	1　自分の教科書を見ながら、その値段についての話を聞く。 2　かつては教科書が有償だったことについての話を聞き、今では当たり前のように手にしている教科書を手にできなかった子どもたちがいたことについて学習していくことを知る。	・現在の教科書の販売価格を紹介し、それが無償配布されていることを説明する。 ・昭和３０年代の教科書購入に関わる大まかな状況を説明する。 ・教科書を買ってもらえなかった子どもの存在を知らせ、資料を読む動機付けとする。	5	
展開	3　資料「真新しい教科書」を読む。 4　貧しさから教科書が買えないことや悪口のため学校へ行けなくなったつらさと差別の不当性について考える。		15	資料１『あけぼの』
	貧しさから教科書を買ってもらえなかったことでクラスの友達から悪口を言われ、学校へ行けなくなってしまった子どもたちはどんな気持ちだったのだろう。			
	・勉強ができなくて悲しい。 ・仲間はずしにされてつらい。苦しい。 ・本当は学校で友達と遊びたい。 ・自分は、友達と同じ遊び道具を持ってなくて仲間に入れてもらえなかったことがあったけど、そのような悲しさがずっと続くのだからつらい。	・教科書がないことの不便さや悲しみや悪口のため学校へ行けなくなったつらさを想像させる。 ・自分の生活に寄せて考えているよさを認める。		
	・自分の力ではどうにもならないことが悔しい。	・本人や家族に責任あることではないことを確認する。		

	・教科書をもってくるという当たり前のことができないから。 ・みんなと同じようにできないことをばかにしてしまう気持ち。 ・自分にも相手の事情を考えないで悪口を言ってしまうようなことはある。 ・本人の責任ではないことで悪口を言われている。 ・いじめと変わらない。 ・許されないことだ。	・悪口を言ってしまった子はどういう気持ちから言ってしまったのかを問い、差別の不当性に気づかせていくようにする。 ・悪口を言ってしまった子と似たような感情が湧く場合もあることについて考えさせる。 ・自分たちの抱いた感情を振り返らせ、差別の不当性に気づかせていく。		
	5　子どもたちに教科書を持たせるために教科書無償運動をおこした親たちの願いを考える。 高知市の〈教科書をただにする会〉の人々は、どのような願いや決意をもってこの運動をしたのだろう。 ・教室で教科書をもたせて学ばせたい。 ・貧しくても勉強をさせてやりたい。 ・貧しさやそれが原因の差別は子どもたちの責任ではない。子どもたちを守りたい。 ・差別を受けないようにさせたい。 ・子どもたちが犠牲になることは許せない。 ・今ここで立ち上がらなければ変わらない。	・子どもたちに教科書をもたせたいと願う親の気持ちを吹き出しに書いて話し合わせるようにする。 ・運動を始めざるを得なかった人々の思いを考えさせる。 ・子を思う親の願いが高知から全国に広がって実現していった価値ある運動であることを話す。 ・憲法２６条の条文の意味を本時の学習活動と関連させて考えられるように説明する。	20	吹き出し
まとめ	6　今の自分たちとのつながりを理解し、学習を振り返る。 このように、子どもたちのために、全国のさきがけとなって教科書無償運動を展開した中心には、差別により貧困に苦しんでいた人々もたくさんいました。 明治以降、差別をなくそうと運動を続けた人々は、全国水平社を創立し、「人々が互いに尊敬し合うことによって平等な社会を築こう」という呼びかけをしてきました。教科書無償運動の中心となっていたのは、このような運動の願いを引き継いできた人々だったのです。	・資料をもとに、今の自分とのつながりを考えさせる。 ・「保護者の皆様へ」の「意義と願い」にふれながら感想をまとめさせる。 ・以下の内容で教師が話をする。	5	資料２ [配布封筒]

資料１　「真新しい教科書」（『あけぼの』）
資料２　文部科学省教科書配布封筒

（『同和問題学習展開案』（長野県教育委員会）より）

保護者の皆様へ

お子様の御入学おめでとうございます。

この教科書は、義務教育の児童・生徒に対し、国が無償で配布しているものです。

この教科書の無償給与制度は、憲法に掲げる義務教育無償の精神をより広く実現するものとして、次代をになう子供たちに対し、我が国の繁栄と福祉に貢献してほしいという国民全体の願いをこめて、その負担によって実施されております。

一年生として初めて教科書を手にする機会に、この制度にこめられた意義と願いをお子様にお伝えになり、教科書を大切に使うよう御指導いただければ幸いです。

文部科学省

「わたしのおかねなのに」
ー 識字学級のつづりかたから学ぶ ー（学級活動）

1　題材設定の趣旨

同和問題の具体的な内容をほとんど知らない児童が、差別のために奪われた文字を取り戻すために識字学級に通う吉田一子さんの生活つづりかた「わたしのおかねなのに」を学ぶことによって、同和問題の現実や、それを乗り越えてきた人間のたくましい生き方を知り、人間の生の言葉の重さをかみしめながら、同和問題をなくそうという心や、自分自身が抱えているさまざまな人権問題を乗り越えようとする意欲を育てる。

2　学習のねらい

(1)同和問題の具体的な現実や苦しみを乗り越えようとする人たちのたくましい生き方にふれ、自分自身のこれからの生き方につなげて考えることができる。

(2)識字学級の意義と活動内容がわかる。

(3)自分自身を語ることの大切さやすばらしさに気づき、自分の生活を見直すことができる。

3　指導計画

時	児童の活動	指導・助言
1 2	○「わたしのおかねなのに」（一）（二）を読み、話し合うことによって、吉田さんが苦しい生活のため学校に行けなかったことを知る。	○（一、銀行での出来事の部分）を読みそれぞれの疑問を出し合う。 ・銀行の人はどうして代わりに書いてくれなかったのだろうか。 ・吉田さんはどうして字が書けなかったのだろう。 ○（二、生い立ちの部分）を読み、吉田さんが学校に行けなかった理由を考え話し合う。 ○自分のおじいさんやおばあさんの小学校時代のお話しを聴き、当時の生活の様子を知る。
3 4	○「わたしのおかねなのに」（三・四）を読んだり、字や数字の練習を実際にすることによって、識字学級に通う方の努力について知り、自分の考えを深める。	○（三・四、その後の努力の部分）を読み、吉田さんのその後の努力を知るとともに、識字学級で使われている日常習字のテキストを使って練習し、識字学級についての理解を深めていく。 ・「手紙の宛名」や役場の「市税口座振替依頼書」を書く練習をしよう。
5	○「わたしのおかねなのに」を学習してのまとめをし、自分の生き方につなげる。	○（五、ふたたび銀行へ行く部分）を読み、自分の字でお金を出すことができた吉田さんの心情を考える。 ○長野県における識字学級の活動について知る。 ○これまでの学習をふりかえり、これまでの経験やこれからの生き方を語り合う。

4　具体的な活動内容（実践事例）【第５時】

A　題材名「わたしのおかねなのに」

B　ねらい

吉田さんの銀行でのつらい体験や生い立ち、識字学級での学習活動を知った児童が、「わたしのおかねなのに（五、ふたたび銀行へ）」を読んで、吉田さんの心情にふれ、感想を出し合うことによって、苦しみを乗り越えていった吉田さんのたくましさやすばらしさを知り、これからの自分のあり方を考えることができる。

C　指導上の留意点

・つづりかたに表されている叙述から、同和問題の実態を学ばせていくが、本時ではその実態が同和問題であるというおさえをせず、以後の課題としていく。ただし、児童の気づきがあればそれを取り上げていく。
・前時に扱った日常習字のプリントが識字学級で実際に使っておられたものであったことを伝えたり、識字学級の方々が作られた作品にふれたりすることで、共に自分の抱えている人権問題をはじめとするあらゆる人権問題をなくすために努力しようという意欲を育てたい。

D　実践記録

	児童の活動	指導・助言
5	・前時まで学習したことを振り返る。 「吉田さんは自分の住所と名前を識字学級で何度も練習されたんだったなあ。」 「識字学級とは、貧しさの中で、義務教育さえ受けることができず、文字を奪われてきた人々を対象に作られた文字を習う学級のことだったなあ。」 「自分でも書いたけど難しかったなあ。」	・「これまで勉強してきたことを思い出してみましょう。」 ・これまで学習したことが書かれている模造紙を見ながらふり返らせる。 ・「識字学級について、わかったことを発表しましょう。」 ・吉田さん宛の封筒を自分で書いた感想を発表する。
30	・「ふたたび銀行へ」を読み、吉田さんの心情について考え合う。 「十万円と一緒に通帳が返ってきたときの喜びは、きっと生まれて一番の喜びだったと思う。」 「これまで識字学級のみんなとがんばってきて良かったなあと思っているだろう。」 ・長野県の識字学級の現在の活動を知る。 「長野にもがんばっている方がいらっしゃるんだ」 「きれいな作品だなあ」 「ずいぶん時間がかかっただろうなあ」 ・これまでの学習を振り返り感想を書く。	・長野県にも識字学級があることを伝え、造花の盆栽や飾り等、識字学級の皆さんの作品を見せ、識字学級の活動について説明をする。 ・「みんながこれまで学習してきて思ったことを学習プリントに書いて下さい。」 ・人権問題を解決するために自分たちはどうありたいか、自分の決意を書かせる。
10	・これからの自分のあり方を考え、発表し合う。 「識字学級のみなさんは、苦しいことに負けず、立ち向かっている。私もがんばらなければいけない。」 「吉田さんの努力に比べると自分はまだ足りなかった。」 「吉田さんを励ました方々のように自分も人のために何かできる人になりたい。」	・「発表して下さい。」 ・自分の経験につなげて語らせたい。 ・最後に解放子ども会員の感想を紹介し、解放子ども会と識字学級の取組や願いが同じであることに気づかせる指導も考えられる。

（『同和問題学習展開案』（長野県教育委員会）より）

５　資料

『わたしのおかねなのに』

吉田一子（六十八さい）

（一）

・きょねんの　四月二十日の　あさ　です。

「きょうは　ぎんこうへ　いって、おかねを　おろして　こなくては。」

と、おもいました。

　こうせいねんきんが　三万五千円　はいっている　はずです。そこから　三万円だけ　おろしたいと　おもいました。

・そこへ　きんじょに　すんでいる　むすめの　順子が　やってきました。これ　さいわいと　いつものように　順子に　たのみました。

「きょう　ぎんこうへ　いくから、また　かみに　かいて。」

「なんぼ　だすんや。」

「三万円。」

「もう、いつも　あさばっかりに　いうて。いそがしいのに。」

　おこりながらも、順子は　かいて　くれました。

・それを　もって、えきまえの　ぎんこうにいきました。まど口には　わかい　女の人が　すわって　いました。

「おねがい　します。」

と　いって、かみと　つうちょうを　わたしました。すると、その女の人は　ちょっと　かみを　みて、まえのほうを　ゆびさし、

「あそこに　かみが　ありますから、もういちど　かいて　ください。」

と、かみを　かえして　きました。きんがくの　ところの　０が　二じゅうに　なって　いるから、おかねをだせないと　いうのです。

・わたしは　あわてて、

「わたし、字　よう　かかん　から、あんた　ちょっと　かいて　ちょうだい。」

と、たのみました。けれども、女の人は、

「だめ　です。じぶんで　かかなくては。」

と　いって、かいて　くれません。

・わたしはもう一ど、

「わたし、字　しらんから、これ、むすめに　かいて　もろたんや。せやから、あんた、すまんけど　かいて　ちょうだい。」

と、いっしょうけんめい　たのみました。それでも、女の人は、

「だめ　です。じぶんで、かかなくては。」

と　いう　ばかりです。

・わたしは、しかたがないと　おもって、つうちょうをひったくって　かえろうと　しましたが、もうひとり　女の人が　いたので　もう　一かい　たのんで　みました。でも、その人も　いうことは　おなじ　でした。

・わたしは、もう　はらがたって　しかたがないので、

「字、しらんもんは、じぶんの　おかねも　だされへんのんか。」

と、くやしさを　ぶつけました。

・くやしいやら、つらいやら、とても　なさけない　おもいを　して、　かえって　きました。

（二）

・わたしは、大正十四年六月十五日が　たんじょう日になって　います。ならけんの　ある　むらで　うまれました。二つのとき、母おやが　しんで、やおに　もらわれて　いきました。ところが、わたし、母おやに　えんないのか、六つのとき、そこの母おやも　なくなって　しまいました。

・だから、学校なんか　一日も、いっていません。「なんで　学校て　いくねんやろ。学校　いって、なにするねんやろ。」と、ずっとふしぎで、わからなかったのです。となりの　いえの子が、「ハト」とか「マメ」とか、いうてるこえは、ときどき　きこえていた　けれど、なんのことか　ぜんぜん　わかりませんでした。

・それでも　父おやに、九九だけは　おしえて　もらいました。

「字は　しらんでも　九九　おぼえてたら、もの　かいに　いったかて、なんでも　かんじょう　できるんや。」いうて、おしえて　くれました。父おやの　まえに　せいざして　けいこ　しました。いねむり　したら、きせるで　あたまを　カツンと　やられたものです。

　そんなことが　おもいだされて、なみだがこみあげてきました。

（三）

・その日のゆうがた、順子のいえに　いってあさのことを　はなし、

「おまえが、ちゃんと　かいて　くれへんかったから、おかね　だされへんかった。」

と、ぼやきました。

　すると　順子は、

「いまから　ぎんこうに　でんわ　したる。」と　いって、でんわを　かけてくれました。

「もし　もし。」

　どうやら　おとこの人が　でてきた　ようです。でんわの　そばに　いたから、ぎんこうの人の　こえも　よく　きこえました。順子は、わたしが　はなしたことをいってから、「字、かかれへん　もんは、じぶんの　おかねも　だされへん　のですか。」と、おこりました。

・ぎんこうの人が、

「いくら　だしに　こられたん　ですか。」

と、ききます。順子が　また　おこった　こえで、

「そんな　もんだいじゃ　ないでしょ。大きな　きんがくなら　かいて　くれて、小さな　きんがくなら、かいて　くれない　のですか。」

と、いいました。

・ぎんこうの人は、

「きほんてき　には・・・・・・・・」

「きほんてき　には・・・・・・・・」

と、おなじことを　なんども　くりかえし　いって　います。順子は、たまりかねたように、

「この　よのなか、字　かける人　ばっかりと　ちがうでしょ。おたく　みたいな　ぎんこうなら、よけいに人けんがくしゅう　していると　おもうて　ましたわ。」

と、いいました。

・この　やりとりを　きいて　いると、わたしは　もう、なさけない　きもちに　なって、

「もう　いい。もう　いいで、順ちゃん。」
と、いって　とめました。
　順子は、
「しきじへ　三年も　いってて、じゅうしょも、なまえも　かけんで　どうすんの。ほんまに　くやしい　めにあわんと、ほんきに　なれへんのやから。」
と、こんどは　わたしに　おこります。
・それから　わたしは　おふろ（かつらぎおんせん）にいき、かえりに　また　順子の　いえに　よりました。そしたら、むこが　かえっていて、
「おかあちゃん、ぎんこうから　でんわ　かかって　きたで。なにか　あったんか。」
と、ききます。ぎんこうの人も　しんぱいして　くれているのだな　と　おもいました。
・字を　なんにも　しらなかった　ときは、「ああ、そんな　もんか」と、あきらめて　いましたが、「しきじ」で、すこし　ひらがなの　よみかきが　できるようになった　いまは、くやしくて　くやしくて　なりません。もっと　もっと　べんきょう　して、なまえと、ところぐらいは、かん字で　かける　ように　なりたいと　おもいました。
・あくる日、こんな　おもいは　もう　したくないと　おもいながら、順子と　いっしょに、きのうのことを　日きに　かきました。
・その　つぎの日は　木よう日で「よみかききょうしつ」の　ある日　です。わたしは　この日きを　もっていき、先生に　よんでもらい、じゅうしょと　なまえの　てほんを　かいてもらいました。（ぎんこうの　かみ　には、じゅうしょは　かかなくて　よかったのですが）
　〇〇市〇〇町一丁目７の１０の１０２
　　吉　田　一　子
・その日から、なんども　なんども　けいこしました。えんぴつで　大きく　かいたり、ボールペンで　かいたり、もう　なんかい　かいたか　わかりません。「しきじ」へ　いくと、まっさきに　これを　けいこ　してきました。それでも　まだ　じゅうしょが　なかなか　おぼえられません。すぐ　つまってしまいます。てほんをみないで　かけるように　まだまだ　けいこ　しなくては　なりません。

（四）

・先生は、
「この　ことは、わすれては　いけない　こと　だから、ぜひ　くわしく　かきとめて　おきましょう。」と、いわれました。
・そこで、また　順子に　はなしして、ちょっと　くわしく　かいて　もらいました。それから、東大阪市にいる　順子のいもうとの節子にも　はなしして、節子にもかいて　もらいました。日きよりは　うんと　ながくなりました。
・それを　先生に　みせると、先生は、
「これを　もとにして、もう一ど　いっしょに　かいてみましょう。」
と、いわれました。そして　かきはじめたのが　この文しょうです。これを　かくときが　一ばん　たのしくなりました。
・「こんどは、じぶんで　かみに　かいて、おかねを　だして　きましょう。その日の　ことを　かいて、この　文しょうは　おわります。」
と、先生は　なんども　いわれます。わたしも、そうしたいと　おもいました。

（五）

・ことしの　三月二日の　あさ　です。四月十八日から一しゅうかん、四こくに　おまいりに　いく　ので、十万円　ださなければなりません。
・こんどこそ、じぶんで　かみに　かいて　ぎんこうへいって　おかねを　ひきだして　こようと　おもいました。
・けれど、また「まちがってる」と　いわれないか　しんぱい　です。それで　やっぱり順子にも　かいて　もらいました。もし、わたしの　かいたので　とおらなかったら、順子に　かいてもらったのを　だそうと　おもったのです。
・一ねん　かかって　やっと　ためた　十万円です。これで　だして　もらえるやろか、しんぱい　しながら　ボールペンに　しっかり　ちからを　こめて　かきました。
・それを　もって、ぎんこうの　まど口に　いき、おそるおそる、
「きょう、はじめて　かいて　きたんやけど、これで　いけますか。」
といって、つうちょうと　わたしが　かいたかみを　さしだしました。
・まど口の　女の人は、にっこりして、
「いけますよ。」
と、いってくれました。ほっと　しましたが　まだ　しんぱい　です。
・しばらく　まえに　たっていると、
「吉田さん。」
と、よばれて、十万円と　いっしょに　つうちょうを　かえして　くれました。
・生まれて　はじめて、わたしの　かいた　字で　おかねが　だせたのです。うれしくてうれしくて、なみだがでてきました。
・あくる日の　あさ、順子が　きたので、
「きのう、わたしが　かいた　かみで、おかね　だしてきたで。」
と　はなしました。順子は、
「よかったなあ。」
と、よろこんで　くれました。
・その日は、よみかききょうしつの日　です。
みんなに、
「きのう　じぶんの　字で、おかね　だしてきたで。」
と、ほうこく　しました。みんな、
「よかったね。もう　だいじょうぶや。」
と、はげまして　くれました。

・これで、この　文しょうも　おわりに　することが　できます。（三月三十一日）

（大阪・富田林識字学級）

【参考】

○吉田一子さんをモデルにした『ひらがなにっき』（文・若一の絵本制作実行委員会　絵・長野ヒデ子　解放出版社刊）が、人権ふれあいセンターでの識字・多文化共生学級の取組とともに、社会科教科書にも紹介されています。

○ＮＨＫのドキュメンタリー番組「ＥＴＶ特集・なまえをかいた～吉田一子・８４歳～」でも、吉田一子さんの学び、生きる姿が紹介されました。

※本冊子Ｐ８７～Ｐ１２３までの指導資料は、平成２１年３月に発行された『同和問題学習展開案』（長野県教育委員会）にあるものを転載したものです。

『同和問題学習展開案』作成の上での参考文献一覧】

『部落史に学ぶ』　外川　正明　解放出版社

『いま、部落史がおもしろい』　渡辺　俊雄　解放出版社

『部落史がかわる』　上杉　聰　三一書房

『つながり　人権教育資料集Ｉ（同和問題）』　高知県教育委員会

『身分差別社会の真実』　斉藤洋一＋大石慎三郎　講談社現代新書

『部落の歴史像』　藤沢　靖介　解放出版社

『渋染一揆関係教材資料集』　岡山県同和教育研究協議会

「今、光っていたい」

所要時間　４５分～９０分　　**対象　中学生以上**

ねらい

○日航機墜落事故の悲劇で亡くなられた「愛子さん」の父親が書いた「今、光っていたい」を読むことで、「愛子さん」を取り巻く人々の中に「人として生きるすばらしさ」が息づいていることを感じとるとともに、互いに信頼と愛情を持つことで、同和問題という大きな課題を解決しようとしていったことを理解する。

準備

・資料：「今、光っていたい」（あけぼの中学生版　人間に光りあれ）
・補助資料：中学生人権作文「御巣鷹山を訪ねて……」

進め方

	活動の流れ（指導者の教示、子どもの反応・行動）
導入	1　日航機墜落事故の概要について、インターネットの資料や関連書籍、新聞記事等から知る。
展開	2　「今、光っていたい」を読む。 3　一番印象に残ったことはどんなところか話し合う。 （1）印象に残ったところを一人一人がワークシートにまとめる。 （2）生徒の思いを自由に語らせる。 4　田中さんや愛子さんの婚約者の気持ちを整理する。 （1）田中さんは、以前は同和問題についてどんな心配をしていたか。 （2）婚約者や彼の父親は同和問題に対して、どんな考えを持っていたか。 （3）婚約者や彼の父親、友人達の人としてのすばらしさについて確認し合う。
振り返り	5　学習を通して気づいたこと、感じたことを発表する。 （補助資料：中学生人権作文「御巣鷹山を訪ねて……」を必要に応じて読み合わせる。）

留意点等

○さらに問題を掘り下げて考えるために、次のドキュメンタリー資料を活用する展開も考えられる。
＜啓発ビデオ＞
・『ドキュメンタリー・結婚』　　３３分　【平成 9年（1997 年）作品】
企画：長野県同和教育推進協議会　　制作：信越放送（ＳＢＣ）株式会社

（参考：『参加体験学習プログラム』（人権教育調査研究委員会））

「今、光っていたい」

‥‥‥娘の遺(のこ)してくれたもの‥‥‥

田中　蔚(しげる)

花嫁の　衣装を着せて
茶毘(だび)にふせし
遺骨(ほね)を抱きて　　など微笑(ほほえ)める

１９８５年（昭和６０年）８月１２日、娘が日航機墜落事故で遭難した。娘は中学校で体育の教師をしていた。御巣鷹山(おすたかやま)の山奥で傷があれば自分で止血し、夜露を飲んででも必ず生きているにちがいない。そう信じて現地へ駆けつけた。事故は凄惨(せいさん)を極め、想像を絶していた。

バラバラ遺体の中を気が狂ったように探し求めてわが子にやっと巡り会えたのは７日目であった。

「どんなに変わり果てた姿であろうと、せめて、一晩わが家の畳の上に寝かせてから葬(ほうむ)ってやりたい」という妻を説いて遠い高崎の地で荼毘(だび)にふした。来春の結婚に夢見たであろうウエディングドレスを着せ、好きだったテニスのボールを左手に握らせて‥‥‥。

一筋の煙と共に白骨と化したその遺骨を抱きしめたとき、とめどなく流れる涙と共に「よう帰ってきたのう」と思わずほほえんだ私。

一緒に同道した婚約者の姿がいじらしかった。彼はこの事故の一カ月ほど前に「愛子さんとの結婚を認めてください」とわが家を訪れた。「うちは同和地区ですよ」と言うと「愛子さんから聞いています。両親がお盆にお願いに来る筈(はず)です」これが彼と交わした最初の会話であった。

そして奇(く)しくも遺体収容の藤岡市の体育館で両家の親が対面した。私が同和問題に触れた時、彼のお父さんは「私は教師です。少なくとも人さまに平等を説く人間として自分を偽(いつわ)るようなことはようしません」と言われた。私は返す言葉もなかった。

娘の縁談を聞いた時「それでも親戚の中には反対の人がいるかも」とか「娘が先々思い悩むのでは」と、あれやこれやと思い過ごしていた自分が恥ずかしかった。こんなお父さんや彼だからこそ「わたし部落の生まれなんよ」と重いことばを打ち明けることができたのだろう。「これからも息子をお宅の家族の一員に加えてお付き合

いさせてください」とお父さんはおっしゃった。

お盆休みの休暇が切れ、いくら勧めても彼は職場に帰ろうとしなかった。疲れはてた妻の肩をもみ私に濡れタオルを絞り、買い物や電話の対応や遺体の確認に奔走してくれた。

四十九日がすんでから彼は畳半分もある大きな娘の肖像画を持ってきた。娘の面影が、鮮やかに描かれていた。「仕事の合間に毎晩、絵筆をとる間だけが心安まる時なんです。愛子さんに会いたくなればこの絵を見に来ます」と。四十九日を一つの区切りに思いを断ち切らせたいと願った私だったのだが。

十一月の連休に彼は泊まりがけでやってきた。生まれてはじめての稲刈りや脱穀を手伝ってくれた。「これで来年田植えをすれば僕も一かどのお百姓さんになれますかね」とも言った。あれから数ヶ月、その田植えの時期がやって来る。

遺体の見つかるまでの一週間、娘が神戸を発つ時の衣装や持ち物、歯形などの情報を持って数人の友達が阪神や和歌山から駆けつけてくれた。いずれも大学時代やその後のスポーツ仲間だった。葬式が済んでからも四国や岡山から友達が訪ねてくる。友情とは何なのか。愛とは何なのか。ひとかどに愛の道を人に説いてきた私に果たしてそれが出来るのか。愛とは人に説くことではなく行うことなのだ。それを私は教えられた。

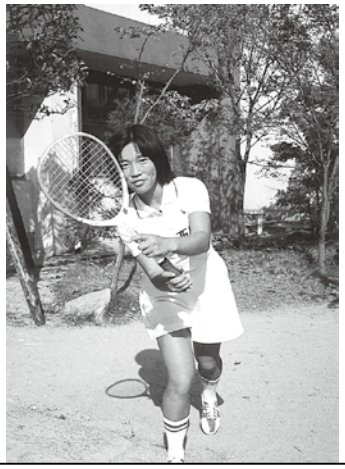
人の命には限りがある‥‥

　だからこそ　自分の思うようにいきたい‥

人は軽く十年先、二十年先を口にするけれど

　そのときを　大切にしなければ‥‥

　今　光っていたい‥



テニスの好きだった愛子さん
西脇高校から全国インターハイ出場
☆写真は「あけぼの」人間に光りあれ
（長野県同和教育推進協議会）より転載

娘の絶筆である。「今、光っていたい」の思いを遺して、娘は帰らぬ人となってしまった。朝夕仏壇に合掌するたびに、唱えるべきお経を知らない私はこの詩を口ずさみながら、水平社宣言の最後にある「人の世に熱あれ、人間に光りあれ」の西光万吉の言葉とが重なりあって、今日も静かに手を合わせる・・・。

人を愛し愛さる人に　育てよと
名づけし「愛子」　空に散り逝く

書　名　『感性に問う人権啓発』
著者名　田中　蔚
出版社名（株）明石書店

中学生人権作文　「御巣鷹山を訪ねて・・・・・・」

兵庫県・丹波市立柏原中学校　三年　八木（やぎ）　遥（はるか）

今年の夏、私は貴重な体験をした。昭和六十年八月十二日、群馬県御巣鷹山に東京発大阪行きの日航ジャンボ機が墜落した。死者は航空機事故最悪の五百二十名・・・。私はこの事故をお盆のニュースの中で、毎年ぼんやり見ているだけだった。「自分には関係ない。遠くの話だ。」と思い続けていた。

しかし、そんな私の考えは、この夏、大きく変わった。夏休みに入ったばかりのある日、母が田中蔚さんという方の手記を見せてくれた。「娘ののこしてくれたもの」と題されていた。何気なく読み始めたが、読んでいくうちに、かぁーっと心が熱くなった。田中さんはこの航空機事故で娘の愛子さんを亡くされていた。しかも愛子さんは、この事故に遭わなければ、春には結婚されるはずだった。幸せの絶頂でこの世を去ってしまった愛子さんは、実は被差別部落出身。部落差別はなくなったように言われるが、家の結びつきが強い日本では結婚に際して、部落を理由に反対する人がまだいるらしい。愛子さんは婚約者に自分は部落出身であることを告げていた。また、それを聞いた婚約者のお父さんも「私は教師です。人に平等を説きながら自分を偽るようなことはできません。」と二人の結婚を祝福されていた。

話は変わるが、夏休みに市内の中学生が集まって開かれる人権交流学習会に、私は参加した。その中で、市内の女子高生が「被差別部落出身」を理由に、彼の母親から交際を反対されたという話が報告された。その母親は彼女の身元を調べたり、「何で黙っていたのか。」と彼女を責めたり、「付き合わせられへん。」と交際に反対したそうだ。さらにあきれたことに、彼までも「なんで黙ってたんや。もう付き合えん。」と言ったそうだ。差別はいけないと誰でも知っている。しかし、実際自分にふりかかってくると、こんな愚かなことになる。これが今の差別の現実なのだ。

この話と重ねてみても、愛子さんたちは差別を乗り越えた、本物の愛で結ばれていたことがわかる。事故後も家族付き合いをされていた婚約者に新しくお見合いの話が持ち上がり、涙ながらに田中さんに相談されたそうだ。田中さんは、「愛子はもういないのです。早い方がいい。」と薦められ、婚約者はその方と結婚された。子供さんが生まれてから奥さんと子供さんをつれて、田中さん宅を訪れられた。その時のことを田中さんは、「この奥さん

には、ここが主人の昔の婚約者の家であるとか、同和地区であるとか、そんな思いはみじんもない。私たちを信じきっている。」と綴られている。愛子さんが残してくれたものは、差別なんかものともしない、人と人とのつながり、本物の人間愛だったのかもしれない。生前の愛子さんは本当に素晴らしい人であったのだろう。多くの真実の愛が残された。

そんな思いを胸に、八月十二日、母とともに御巣鷹山に向かった。手記を通じて知り合った田中さんが現地で迎えて下さった。緑に覆われ、川のせせらぎが響く、とても美しい山で、二十五年前の事故を全く感じさせなかった。いよいよ山に登っていくと、所々に小さな墓標が現れはじめた。この事故で命を落とされた方たちの亡くなられた場所だ。一つの所に墜落したはずなのに、山全体に散らばる墓標。墜落時の衝撃の強さが感じられた。墓標に刻まれた一人ひとりの名前。赤ちゃんからお年寄りまで、あの日、偶然乗り合わせた飛行機に輝く未来を奪われた人たち。その中に愛子さんの名前が刻まれた墓標を見つけた。線香をお供えし、手を合わせた時、はるばる訪ね、そこにたどりついた実感が足下から伝わる感じがした。同時に二十五年の時の流れは、事故の惨状を覆い隠すように、山を再び緑で覆ったが、ご遺族の悲しみ、心の傷はいつまでも消えないことを感じる旅でもあった。しかし、その遺族の悲しみをえぐり出すような「差別手紙」が田中さんに送りつけられていたことも知った。「航空機事故は被差別部落の田中愛子が乗っていたため起こった。愛子は人間じゃない。穢れた畜生だ。愛子は、五百十九人を殺したテロリストだ・・・。」という内容で。それを読んだ母は怒りで体が震えていた。二〇〇四年の消印。まだ新しい。こんな人が未だにこの世に存在することに、私は許せない気持ちでいっぱいになった。しかし、田中さんは「この人自身に罪はない。差別の歴史をきちんと教えられなかったのだ。偏見だけを植え付けられた犠牲者なのだ。」と一切問題にしなかった。それが精一杯の沈黙の抗議だったのかもしれない。

「一日一生涯」・・・これは今年、墓標の横に安置されたお地蔵さんに刻まれた文字であり、生前愛子さんが残された言葉である。中学校で部落差別を受け、己自身を磨こうと卒業アルバムに寄せ書きされた言葉らしい。差別を許さない生き方、差別を乗り越えた本物の人間愛にたどりつけるよう、私も「一日一生涯」の思いで、一日一日を大切に歩んでいきたい。

この作文は、第二十九回全国中学生人権作文コンテスト（法務省人権擁護局・全国人権擁護委員連合会主催）において、法務大臣政務官賞を受賞した作品です。

「１０年後の同級会」

所用時間　６０分　　**対象　中学生以上**

ねらい

○登場人物の気持ちになって、「１０年後の同級会」の読み合わせをしたり、演じたりすることを通して、結婚（部落）差別を解決していくためには、当事者の強い意志だけでなくまわりにいる人達の考え方やともに努力する姿勢が大切であるということを理解する。

準備

「１０年後の同級会」ワークシート

進め方

	活動の流れ（指導者の教示、子どもの反応・行動） 留意点
導入	1　参加者の人数に合わせて、「１０年後の同級会」の登場人物の台詞を割り振ります。この資料では、男１５人、女１５人、計３０人の登場人物で設定しています。 2　自分の担当する台詞を確認します。
展開	3　「１０年後の同級会」の朗読劇を行います。（１５分） 4　全員で感想発表や意見交換をします。（３０分） ①演じてみての感想を発表しましょう。 ②劇中の台詞ややりとり等にかかわっての意見交換をしましょう。 例） ・気になる言葉や共感できる場面について。 ・当事者のまわりにいる人の対応について。 ・部落差別をなくしていくキーワードとなる考え方や行動のしかたについて。 ③自分や家族としてのあり方について話し合いましょう。
振り返り	5　学習を通して気づいたこと、感じたことを発表しましょう。

留意点

○さらに問題を掘り下げて考えるために、次のドキュメンタリー資料を活用する展開も考えられます。

＜啓発ビデオ＞

・「ドキュメンタリー・結婚」　　３３分　【平成　９年　(1997 年）作品】

企画：長野県同和教育推進協議会　制作：信越放送（ＳＢＣ）株式会社

（参考：『参加体験学習プログラム』（人権教育調査研究委員会））

創　作　劇　　１０年後の同級会

【１さゆり　】　わー、久しぶりー。
【２み　ほ　】　本当ねー。
【３かず子　】　中学校卒業以来、１０年ぶりね。
【４たかし　】　みんな変わったなあ。
【３かず子　】さん、美人になったんじゃないの～？
【３かず子　】　失礼ね！そんなの昔からよ。
【５ひとみ　】　そうよ、そうよ～。

・・・・・・・・・＜　間　＞・・・・・・・・・・・・・・・

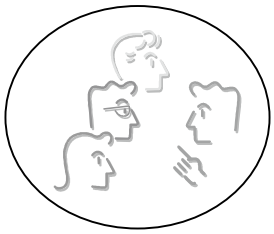
【６みのる　】　え～、おおよそみんな集まったようなので、そろそろ同級会を始めたいんだけど、その前にみんなに聞いてほしいことがあります。
じつは、【７正　雄　】には、『　よう子　』さんという彼女がいるんだけど～・・・・。
【８ゆうか　】　え～、うそ～。
【９とし男　】　【７正　雄　】、おまえ、知らないうちに、この～！
【10太　郎　】　こいつ～、やったなあ～。
【11つとむ　】　おれもうかうかしてられないや。
【12みすず　】　おめでとう。
【13まもる　】　おめでとう。
【14あき子　】　おめでとう。
【15ひとし　】　結婚式に呼べよな。
【16まなぶ　】　おれ、司会やってやるぜ。

【６みのる　】　ちょっと、待ってよ。その結婚のことなんだけど。
【17みき夫　】　おい、何だよ。どうしたんだ？
【６みのる　】　じつは、ここに、困った問題がおこって、みんなに相談に乗ってもらいたくて・・・。くわしくは本人から聞いてくれ。
【７正　雄　】　みんな、今日は、せっかく同級会のところ悪いんだけど・・・、おれは、結婚しようと思っている『　よう子　』さんにプロポーズしたんだ。その時、「わたし、被差別部落の出身なんだけど・・。」って、打ち明けられたんだ。おれは「大事な問題だから一緒に考えていこう。心配しなくていいよ。」って答えた。その後、そのことを両親に相談したら、「絶対に駄目（だめ）だ。」と言われてしまった。おれは、どうすればいいか困ってしまい、【６みのる　】に相談を持ちかけたら・・・・。

【６みのる　】　それで、おれも、簡単に答えられることじゃないし、仲の良かった中学校の仲間に聞いてみたらどうかと思って、ここに集まってもらったんだ。
　ぜひ、みんなの意見を聞かせてくれよ。

【18かつや　】　そうか～。そんなこと、急に言われても・・・、困っちゃうなあ。難しい問題だなあ。

【19まさと　】　そうだよ～。自分にもわからないなあ。



・・・・・・＜　みんな困った顔　＞・・・・・・・・・・・

【20勝　彦　】　どうなんだ、そんなに反対されているんか？

【７正　雄　】　ああ。

【21ふみか　】　でも、反対されても結婚したいんでしょ！？

【７正　雄　】　うん。（うなずく）

【22千　佳　】　でも、親に反対されて結婚できるの？親の意見に従ったほうがいいんじゃない！？結婚って何かと親の力を借りなきゃならない時があるし、この際、親の言うとおりにしたら。

【23あつし　】　おれは、早く結婚して良かったよ。こんな問題にぶつからなくて。

【24つよし　】　そういやあ、おまえ早かったなあ。

【25かおり　】　何言ってるのよ、【２３あつし　】さん！あなた、自分のことしか考えられないの。そんな人だったの！？

【23あつし　】　ごめん、ごめん。そんなつもりで言ったんじゃなかったんだ。

・・・・・・・・・＜　間　＞・・・・・・・・・・・・・・・

【26みどり　】　何とか、みんなで【７正　雄　】さんと『　よう子　』さんのために、力になってあげましょうよ。本当に好きなら、結婚するのが当然でしょう！被差別部落出身ということ、ぜんぜん関係ないわよ。

【27順　子　】　被差別部落出身だからだめだなんて、頭から決めつけて反対する親がおかしいのよ。本人たちの気持ちを一番大事に考えてあげるべきよ。

【28あさこ　】　親なんてのは、いつもまわりのことばっかり気にして、勝手すぎるわよ。

【４たかし　】　おいっ、わかったようなこと言うけど、おれたちだって親になった時どうできるかは、わかんないぜ。

【９とし男　】　むずかしいよな、結婚のことって。

【29理　恵　】　私はね～、相手の人が被差別部落出身であるということを気にするわけじゃないけど、やっぱり親や親戚（しんせき）に反対されると、考えちゃうかもね。

【19まさと　】　あきらめたほうがいいぜ。他にもいくらでもいい子、

たくさんいるんだしさ。親に認めてもらえる人と結婚したほうがいいさ。

【１さゆり　】　ちょっと、今の言い方、何よ。聞き捨てならないわね！本気になって考えてるの？！

・・・・・・・・・＜　みんな黙る　＞・・・・・・・・・・・・・・・

【２みほ　】　かまわないじゃない。結婚すべきよ。親や親戚なんて関係ないわよ。二人の問題よ。

【10太郎　】　「差別をなくそう」と世の中では言うけれど、実際はなかなかむずかしいこともあると思う。でも、本当に二人だけでやっていけるんだったら、結婚しろよ。

【11つとむ　】　【７正　雄　】、そんなに反対されているんだったら、家を飛び出してでも結婚したらどうだ。本気なんだろう？

【３かず子　】　でも、無理して結婚すれば、家へ帰ることができなくなるわよ。結婚してからも何かと親の力を借りなきゃならない時があると思うけど、大丈夫なの？

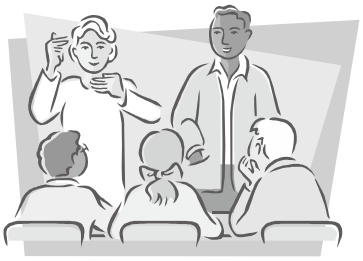
・・・＜　【７正　雄　】黙っている。みんな、目を向ける　＞・・・

【13まもる　】　はっきりしろよ。お前は、打ち明けてくれた『　よう子　』さんの気持ちをしっかり受け止めて決めたんだろう？ちょっと反対されただけで、簡単にあきらめるのかよ？そんなやつだとは思わなかった。お～い、みんな、帰ろうぜ。こんなやつとつきあっている暇なんかないんだ。

【18かつや　】　ちょっ、ちょっと待てよ。結婚したいと思っているからみんなに相談をもちかけてるんだぜ。

・・・・・・・・・＜　間　＞・・・・・・・・・・・・・・・

【16まなぶ　】　本当にその人が好きなら結婚すべきだぜ。おれ、賛成するぜ。



【５ひとみ　】　そんなかっこいいことばかり言わないでよ。私たちが二人の結婚に賛成するってことは、これから二人が立ち向かわなければならない問題について、一緒に受け止めていく覚悟が必要よ。

・・・・・・・・・＜　間　＞・・・・・・・・・・・・・・・

【17 みき夫　】　結婚は、二人が愛し合っていて、合意があればできるんだ。憲法にもあるじゃないか。

【15 ひとし　】　被差別部落出身だから結婚を許さないって、どういうわけだ？親が反対するからできないってそんなバカな話があるかよ。自分が愛する人といっしょになるのが結婚じゃねえのかよ！それが幸せというもんだろうが。

【 9 とし男　】　そうだ、そうだ。おれもそう思う。

【29 理　恵　】　でも、たとえ二人が幸せになったとしても、生まれてくる子どもが一番切ない思いをするんじゃない？親の反対を押し切って結婚したら、子どもがかわいそうよ。

【 3 かず子　】　子どもが、おじいちゃん、おばあちゃんに会えなくなるってこと？

【12 みすず　】　それはおかしいわよ。【 7 正　雄　】さんのご両親はそんなことを望んでいないでしょう？そんなおかしなこと、あってはならないわ。みんなが不幸になってしまう。だから、ご両親にはもう一度よく考えてもらいましょうよ。

【20 勝　彦　】　おまえの両親の態度はひどすぎるぜ。結婚するのは、本人たちの意志だろうが。とんでもない話だ。

【23 あつし　】　おれもそう思う。けど、なぜ【 7 正　雄】の親は素直に二人を祝福してあげられないのかな？

【 5 ひとみ　】　本当は祝福してあげたいんだと思う。でも、別の心が、それをできなくしてしまっているのね。人間の心って難しいわね・・・。私思うんだけど・・・、親戚の人達は、みんながみんな反対なの？

【24 つよし　】　そうだよなあ。そこをしっかり確認しておくことは大事だよな。おまえ確かめたんか？

【 7 正　雄　】　・・・・・。

【21 ふみか　】　何、黙ってんの？

【 4 たかし　】　おまえ、両親の猛反対があっても結婚するつもりなんだよな！？

【 7 正　雄　】　もちろんだよ。

【10 太　郎　】　だったら、『　よう子　』さんの両親に応援してもらって、新しい生活を始めてはどうだ。そうすれば、【 7 正　雄　】のおやじさんやおふくろさんだって考え直すかもしれねえし。

【26 みどり　】　そうよ。そうよ。私たちが盛大に祝福してあげるわよ。

【22 千　佳　】　それは、いいけど・・・・。でも・・・、現実は、そう楽にはいかないんじゃない？私たちが考えているより大変なことだと思うわ。

【11 つとむ　】　結局、おれたちがどうのこうの言っても、最後に決めるのは【 7 正　雄　】だぜ。

・・・・・・・・・＜　しばし沈黙　＞・・・・・・・・・・・・・・・

【27順　子　】　【７正　雄　】さん、ご両親がだめだと言っても、私たちがついているから。

【15ひとし　】　だけど、結婚式でみんなに祝福してもらえるのはうれしいけど、俺だったら、親が出席しないのはたまらないよなあ。

【16まなぶ　】　親を何とか説得すべきだよ。何もしないで、二人だけの生活を選択したら、この問題から逃げることになるよ。

【13まもる　】　二人して逃げることで済むんだったら、同級会を開くまでもねえよ。そんな簡単な問題じゃねえよ。みんなで【７正　雄　】の家へ行って、親を説得しようぜ。なあみんな、どうだ！

・・・＜　一瞬、間があって、お互いに顔を見合わせて　＞・・・

【　全員　】　そうね。（女）　そうだ～（男）

【28あさこ　】　けれど、今一番大切なのは、まず【７正　雄　】さんが、何時間でも何日でも、いろんな方法で両親を説得することだと思う。親戚の中には協力してくれる人もいるかもしれないじゃない。

【29理　恵　】　私・・・、ずっと迷っていたんだけど、みんなの考えを聞いて、二人を応援したいと強く思うようになった。【７正　雄　】さん、親に認めてもらえるように頑張るんだよ。

【17みき夫　】　ダメだと言われても、あきらめるなよ。おれたちがついているからさ。なあ、みんな！

・　・・・・・・・＜　みんなうなずく　＞・・・・・・

【４たかし　】　【７正　雄　】、おまえ、その気持ちをしっかりと『　よう子　』さんに伝えろよ。そして両親を説得するんだ、結婚を認めてもらえるまで。

【30よし子　】　みんなも知っているでしょう。私は外国の人と結婚をしたわ。
初めは認めてもらえなかったけど、ついに二人の仲を認めてくれたわ。今は、好きな人と一緒になれて、本当に良かったと思っているわ。がんばってよ。

【24つよし　】　同じ人間だもの。いつまでも差別にとらわれているなんて、考えただけでもおかしいよ。差別がない明るい社会を、みんなで作っていかないとね。

【１さゆり　】　ねえ、中学校時代にクラスで、同和問題について勉強したじゃない。

【７正　雄　】さんも、自分の意見をしっかり言ってたじゃないの。思い出してみて！あの時学んだことを。自信を持って、両親に言ってみるのよ。

【19まさと　】　自分も、中学校時代を思い出したよ。まず両親に、この問題を正しく理解してもらうことが大切だと思う。自分たちが中学校で勉強したことは何のためかというと、こういう時に正しく行動できるために！だよな。うん、そうだ。

【20勝　彦　】　応援が必要な時は、いつでもみんなで親や親戚の人たちを説得してまわるからさ。

【18かつや　】　おれは、何があっても応援するぜ！がんばれよ！二人に愛があれば、どんな壁も乗り越えられるよ。

【６みのる　】　みんながこれだけ応援してくれるんだ。自信を持ってあたってみろよ。

【７正　雄　】　絶対、説得してみせるよ。時間がかかろうともがんばるよ。みんな、真剣に考えてくれて、今日は本当にありがとう。おれ、うれしかったよ。いざという時に相談に乗ってくれる友達がたくさんいてくれて、やっぱりこのクラスで良かったって、心から思うよ。

【６みのる　】　さあ、みんな、乾杯しようぜ～！！

【　全員　】　お～！！

○この劇（台本）は、２０年ほど前に長野県内のある中学校において、同和問題について学習をしたのち、部落差別がなくなることを願って、中学生と担任の先生によって作られたものです。今回、啓発資料として利用できるように修正を加えてあります。

○劇中の登場人物は仮名です。